



魄の行方

—悼金子兜太

宮坂 静生

春の猪出合頭に兜太の目
太陽は膨みつゞく山鯨
老子ほどの大き息吸ふ春の人
猪を祀る神棚書斎にも
からつぽな春の夕日や兜太死す
斑雪嶺も兜太の通夜へ急ぎをり
からつぽな春の夕日や兜太死す
斑雪嶺も兜太の通夜へ急ぎをり
斑雪嶺のあなたへ魄の途ひかる
慟哭や浅間嵐に靈交る
春の眠り薔薇色させらる
雛よりも兜太色白涅槃変
隕生涯に一度柩出入りの魄あそび
耕耘機爪休めをり兜太の葬
喝といふ嗜みつく声や春の葬

祭壇の兜太青鯫が来てゐる

柩から雲雀とびたつために窓

子が柩閉めて兜太は春菩薩

遠き遠き春の湊へ柩押す

三月二日は皆子夫人の命日

皆子忌の沖へ兜太の舟を出す

己が焼かれ秩父の山火夜もすがら

空に芯生るゝ踏青兜太の死

兜太の喪雪解溜りがみな眸

兜太亡し末黒追はるゝ萱鼠

引鶴の兜太の魄をはこびるる

兜太いま地中のマグマ下萌ゆる

兜太根つ子皆子は春の渚かな

幻聴のけさの華やぎ兜太の忌

春窮や関東平野一つ墳は墓か

森が喪に服す疇地中から墓か

磧の彼岸へ兜太着ける頃



追悼 金子兜太 「魄の行方」 メモランダム

宮坂 静生

無常迅速をひしと受け止めざるを得ない一月ほどであった。

「俳句界」二〇一八年四月号に掲載予定の特別作品五十句「魄の行方」の初稿校正最中に、金子兜太の訃報に接した。該当五十句は大峯あきら（一月三十日逝去）、石牟礼道子（二月十日逝去）両氏の追悼句を念頭においた作品であったが、急遽、兜太長逝を考えてほしいと言われた。総合俳句誌としては当然のことと、私自身の気持でもあった。

同じことは「俳句あるふあ」（二〇一八・春）に「兜太の宇宙・あきらの宇宙」を書き、その初稿校正中にも起つた。初稿は大峯あきらの逝去、兜太はお元気であったから、ここでも、兜太訃報により、文意を変更することになった。二月二十日午後十一時四十七分、急性呼吸促迫症候群により兜太は亡くなる。九十八歳であった。

三月一日通夜、二日本葬。通夜に伺い、本葬に私は現代俳句協会会长として弔辞を捧げた。

周知であるが、兜太は平成十二年度以来、現代俳句協会名誉会長であった。昨年、十一月一十三日協会創立七十周年記念式典において、特別功労者表彰を受けた兜太。その協会入会は昭和二十八年、兜太三十四歳。昭和五十八年には前任会

長横山白虹逝去の後会長になり、わが子のように協会に愛情を注ぎ育んでこられた。金子兜太は名実ともに協会のシンボル的存在であった。実は、これら周知のことはどうでもよかつた。

私にとっての兜太は第一句集『青胡桃』（昭和三十九年刊）を賞美されて以来、近年の『噴井』まで、つねに懇篤なことばをかけてくださる恩人であった。実は、これもどうでもいいことであった。

私は、一言でいうと、金子兜太の人間を心底尊敬し、信頼していた。これだけであった。それは、兜太ご本人にも十分に伝わり、昨年九月、十一月と二回にわたる長いインタビューの歎談が遺言になってしまった。これは無性に哀しい。

逝去以来、十日ほど、兜太追悼句を百句ほど特製の句帖に書いた。初めの十句ほどを締め切り間際の「岳」に、後半を上掲「俳句界」に発表した。ここには「魄の行方」と題してもとめた追悼三十句に関し、その中の句に自注を施したい。所詮は無駄こととの思いがある。よしなしごとであるが、哀しみに堪えず、兜太をおくる世迷言と笑い飛ばしていただきたい。

がきらきらと光る。いま魂が進み行く途ではないかと、咄嗟に嚴肅な思いが込み上げてきた。

慟哭や浅間嵐に霧交る

三年ほど前、兜太と旧制水戸高校時代の話をした折に、藤澤誠先生のことにつれていた。藤澤先生は若手教授として中国哲学（チャンテツ）と水戸学を講じていた。私の中では、兜太の初めての句「白梅や老子無心の旅に住む」の「老子」が頭にあつた。いたいた、懐かしいなあという。実は後年、私も信州大学で藤澤先生から老莊学の講義を二年間受けていた。兜太の老子はその頃読んでいた北原白秋の詩句からの援用とか。本人の言があり、そうであろうが、私には弁舌巧みな藤澤先生の語る老子の面影が兜太に重なるのである。「大き息吸ふ」がそれ。兜太は猛暑の人でも夏の人でもなく、「春の人」ではないか。私には国民詩人兜太「春の人」の面影は、晩年によく動かし難い。

斑雪嶺も兜太の通夜へ急ぎをり 斑雪嶺のあなたへ魄の途ひかる

春の眠り薔薇色させる殯 雛よりも兜太色白涅槃変

三月一日、特急「しなの」は春の気配が漂い出した常念岳や餓鬼岳など日本アルプスを西に仰ぎながら走っていた。麓の里山は斑雪嶺である。夕方六時からの通夜の時間に余裕を見ていはいるが、気持が急ぐ私には、山も一緒に伴走してくれているのがよくわかった。穂高岳から蓮華岳へかけて、奥嶺

亡骸が薄くれない。可愛いほどに美しい。高貴というには柔和、微笑が漂うような。亡骸から薔薇色が発光するのか、どこからか薔薇色がさすのか。しばし、いやかなり長く、柩の兜太に語りかけていた。

母親譲りの色白、餅肌。「雛よりも色白」は思わず込み上げてきた形容だ。兜太涅槃変相を目の前にして、血氣盛んな

時の兜太をちっちゃうと思い浮かべながら、しきりに人間の「実体」とはと、胸が痛むのであった。

生涯に一度柩に入れば春

曠夜の柩出入りの魄あそび

兜太が柩に入る。こんなことが想像できただろうか。柩に入る。途端に兜太は春の人、いや春の季節そのものに微塵と

化し、宇宙に漂い出したのではないか。通夜は現世と来世との境の刻。魂が未練の此の世と真に自由な彼岸とを莊子の蝶のように戯れてい。『魄あそび』。

本葬

喝といふ囁みつく声や春の葬
祭壇の兜太青鮫が來てゐる

臨済宗の名僧が「じゃんばん」の伴僧一人を連れる。力強い「喝」であった。その時、祭壇の遙かを見つめる兜太の眼は青鮫が来ていることに気付いたに違いない。私も見た。

「梅咲いて庭中に青鮫が来ている」。あの青鮫は庭中にはようよ集まっていたであろうが、私が祭壇に気付いたのは単数であった。眼が霞んでいた私の見落としもあるが、確かに青鮫を見つけ感動した。

とり本望であろう。

狼を祀る神棚書斎にも

兜太の書斎にある神棚。その下が立禪の場でもあつたか。およそ二百人、亡き人たちの名を唱えるのである。あるいは神棚には狼が祀られているか。

兜太の喪雪解溜りがみな眸
兜太亡し末黒追はるゝ萱鼠
空に芯生るゝ踏青兜太の死

雪解が始まる。雪解水の溜まりは澄んでいる。眼がある。見下ろす人を水のきれいな眸が見詰める。兜太の死を哀しんでくれている。アニミズムの世界だ。野焼の後の末黒から萱鼠が逃げ出した。棲家が焼かれてしまつた。そういえば兜太の死後、空が緊張しているのか、芯ができた感じだ。大らかさがなくなる。

引鶴の兜太の魄をはこびる

春は鶴が北へ帰る。今年は群鶴が大事な魂魄を担つてゐるのか、整然と飛び立つた。兜太の魂が運ばれて行くに違ない。魄は宇宙のどこへ行くのであらうか。

柩から雲雀とびたつために窓

柩からとびたつたのは雲雀であった。秩父の春の野に囀る雲雀であった。日本武尊の最期のような白鳥ではなかつた。私はそこに兜太の温みを感じた。

子が柩閉めて兜太は春菩薩
遠き遠き春の湊へ柩押す
皆子忌の沖へ兜太の舟を出す

子の眞土さんが柩の窓を閉める。身内も参会者も蘭の花を捧げ、小さな折紙の千羽鶴をたくさん隙に納めた。

折からの三月一日は兜太の愛妻皆子さんの命日であった。偶然は粹な縁を齎すものよ。遠い別世界の春の湊へ、兜太の柩をこの世から押し出してやる。そこは愛妻が待つてゐる海岸。

己が焼かれ秩父の山火夜もすがら

兜太が好きな子規のイメージを借りる。子規が描いた火葬される幻想風景だ。山中で隠亡が積み上げた薪の上に、おのれの柩が置かれる。一夜、とろとろと焼かれる。秩父の春の山焼が今年は兜太を焼く山火になつた。兜太に

兜太いま地中のマグマ下萌ゆる
春窮や関東平野一つ墳^は墓
宇宙の力が俺に土から発した人間くさい句を作らせると兜太はいう。肉体を亡くした兜太は地中のマグマと化して、まず春先、下萌えを盛んに鼓舞しているのではないか。

森が喪に服す嶋地中から

森が喪に服す嶋地中から
嶋の彼岸へ兜太着ける頃
春は麦の収穫期を迎える頃まで、貯えが欠乏した。「春窮」である。貧富の差がはげしい今日、立ちはだかる新しい富豪の前に、貧困層は隠れてしまい、春窮は昔語りのごとし。しかし、眼を開けば、春窮はいよいよ深刻である。「暗黒や関東平野に火事一つ」と兜太に詠まれた関東平野全体が一つの墳墓と化している。

森の鳥は喪に服し、声を立てない。代って地中から亡きものたちが囀を届ける。兜太は鳥。雲雀。ともに囀つてゐる。別界から兜太亡き後の彼岸など無化するかのようだ。